

モンハン小説【オトモ たちの日常】

taki20191019

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女らしさに欠ける旦那さんにつかえる、大福モチのような毛並みのオトモアイルー「ダイフク」と、まっくろ毛並みのニヒルなオトモメラルー「ツキミ」のゆかいな日常。

【おもな登場人物】

ダイフク ……ボクニヤ。まっしろ毛並みのオトモアイルー。

ツキミ ……まっくろ毛並みの先輩オトモ。ニヒルニヤ。

だんなさん ……女ハンター。へっぽこ太刀使い。粗暴で無骨ニヤ。

ハンマー使い ……ベテランハンター。ボクはホモだとにらんでるニヤ。

ミタラシ ……

ボクの後輩オトモニヤ。けどその正体は…。

【オトモたちの挑戦】

ふがいない旦那さんのかたき討ちに、フルフルに挑む、二匹の勇敢なオトモのお話。

【みわくのラーメンチケツト】

ラーメンチケなる不思議なチケツトをもらったダイフク。それを見たツキミは「オニヤツ！ そ、それは…」とエキサイト。

【オトモたちの休日】

ぼっちハンターのだんなさんに、ついに狩り友が。でもそのせいで、ダイフクツキミはお留守番の日々。二匹はついイタズラを始めるが、だんだんエスカレートしていつて……？

【ボクはがんばってるニヤ！】

へマをして怒られたダイフクは、だんなさんの元を飛び出し家出する。そこへツキミが現れ……？

【オトモたちの逆転】

用事で故郷に帰ることになったツキミの代わりに、見習いオトモのミタラシが来る。可愛くて有能なミタラシにすっかり居場所を取られるダイフク。しかし、そんなミタラシの正体は……。

目次

【オトモたちの挑戦】	—	1
【みわくのラーメンチケツト】	—	8
【オトモたちの休日】	—	13
【ボクはがんばってるニヤ!】	—	24
【オトモたちの逆転】	—	28

【オトモたちの挑戦】

ボクはダイフク。まっしろ毛並みのオトモアイルー。

でも旦那さんときたら、最近はちつとも狩りに出ようとしないんだニヤ。

これというのも、先日、旦那さんが返り討ちにあつた、につつきアイツ、あの白いブヨブヨの気持ち悪いヤツ、フルフルのせいなんだニヤ。

（目が無いとんでもないヤツニヤ！ 非常識きわまりない生物ニヤ！）

ブヨブヨの体に旦那さんの太刀は歯が立たず、ボクたち（ボクと先輩オトモアイルーのツキミ）の奮戦むなしく、旦那さまは頭からパツクリ食べられちゃったのニヤ。

ザザミ防具のミニスカートと足だけが、フルフルの口からはみ出していたのは軽くホラーニヤ。はつきり言つて恐怖だったニヤ。

アニヤー！ とひたすらうろたえるしか出来ないふがないボクたち……。

でも、旦那さんがフルフルに消化されてウンチにされる前に、通りすがりの渋いベテランハンター様が、レベル3まで溜めに溜めたハンマーの猛烈な一撃をフルフルのどてつばらに炸裂させてくれたのニヤ。

フルフルのヤツは、「ブフォツ」と旦那さまを吐き出したのニヤ。いい気味ニヤ。でも

旦那さんはだらしなく白目をむいてピクピクしてたのニヤ。

ボクとツキミは、臨時のネコタクシーに変身して、その場からドロンのニヤ！
クエストは失敗だったのニヤ……。

それ以降、旦那さんは、拠点の村で、こんがり肉を食べてはブレスワインをガブガブ
飲むだらしのない日々……。

女ハンターに慎みはそれほど必要ニヤいけど、それでもバキバキの腹筋がポンプ
ンになっていくのは、見てられないニヤ。どっちがフルフルか分からないニヤ。

ひと狩り行くニヤ！ と誘っても、旦那さまは、ぽーっとしてため息をつくばかり。
こりや重症ニヤ。

先輩のツキミと話しあったニヤ。

「オレたちで、あのフルフルをやつつけるしかニヤい」

ツキミは重々しく言うのニヤ。

それはちよつと無謀なんじゃ……と反対したかったけど、旦那さんに元のキリツとし
たハンター様に戻ってもらわない事には商売もあがったり。選択の余地なしニヤね。

こうしてボクたちは、オトモ二匹で宿敵フルフルに敢然と立ち向かったのニヤ。

もちろん、大失敗ニヤ。

ネコの手にはあまる仕事だったニヤ。ボクたちアイルーがニヤンターとして大活躍するのは、もつとずっと後の時代ニヤ。

そもそもの誤算は、フルフルのねぐらが、寒い洞窟という事ニヤ。

ぶつちやけ、ボクたちネコは寒いところが苦手ニヤ。

寒い洞窟の中では、ボクたちの、あるんだか無いんだか分からないような戦闘能力も半減以下ニヤ！

フルフルがビリビリの電撃を飛ばしてきて、ツキミが「ア、ニヤ、ア、ア、ア」と痺れたニヤ。

ボクはすんでのところかわしたニヤけど、まったくのマグレニヤ。

次はかわせない……！ 直感したニヤ。

「ダイフク……おまえだけでも……逃げ……」

地面に伏せたツキミの、プルプル震える手がパタツと倒れたニヤ。

絶体絶命とはこの事ニヤ。ボクは洞窟の壁際に追いつめられたニヤ。フルフルはイヤらしい顔（目の無い真つ白なミミズみたいな顔ニヤけど……）でボクを見るニヤ。

「ボ、ボクは、美味しくないニヤよ……？」

涙声で訴えるけれど、ダイフクなんておいしそうな名前を付けられた白ネコのボクが言っても説得力は皆無ニヤ。

ボクたちオトモだけで大型モンスを狩るなんて、無謀だったニヤ。勇者様きどりだったニヤ。フルフルベビーくらいにしとくべきだったのニヤ……。

だ、旦那さん……タスケテ。

「テヤアツ！」

そのときニヤ。誰かが叫んで、スゴイ勢いで突っ込んできたのニヤ。

ガガガガと凄まじい音がして、フルフルが真横に倒れたニヤ。

ニヤニヤニヤ!?

「アホ猫ども、無事!？」

それは銀色に光り輝くランスを装備した旦那さまだったニヤ！ しかも戦乙女のようなキリリとしたリオハート装備!?

ぶざまにひっくり返ったフルフルの頭をガスガスぶっ刺しながら、旦那さまは勇ましく、

「手間かけさせないでよね！」

か、カツコ良いニヤ！ 痺れるニヤ！ 憧れるニヤ！

あ！ 起き上がったフルフルが伸縮自在の首を振り回してきたニヤ！

けど、旦那さまときたら、ヒヨイヒヨイと華麗なステップでそれをかわし、動きの止まった一瞬を狙って、逆にランスでズバズバ突きまくりニヤ。

それはまさに、歴戦の女ハンター！ 熟練の達人！ ランスの女神様ニヤ！

でも、なんでランス？

「だ、旦那さん……それはいつたい……」

当然ボクは聞いたニヤ。

「んー」と旦那さまはフルフルの脚を無造作に突きまくってバタンつと転ばせると、「あたし、もともとランサーだったのよね」と言ったニヤ。

ボクはツキミを見たニヤ。

ツキミもボクを見て、知らない知らないみたいに首を振ったニヤ。

ジャンボ村とかいうところ出身の旦那さんと一緒に狩りに行くようになったのは、ポツケ村に来てからのニヤ。わりと最近ニヤ。女には秘密がいつぱいニヤ。

「しばらく、太刀の練習してただけけど、やっぱ慣れた武器はしっくりくるわ」

そう言つて、あつさり、かんたんに、いともたやすく、あのにつき白い奴を倒してしまつたのニヤ。

最後は、突進でガガガと華麗に決めると、フルフルのヤツは倒れて動かなくなったニヤ。

ザマミロニヤ！ クエストは大成功ニヤアアアアア！

村に帰る道すがら。勝手な行動で迷惑かけたボクたち二匹は、旦那さんから容赦ないオシオキのゲンコツを落とされて、シヨンポリしてたニヤ……。

けど、旦那さまは上機嫌ニヤ。5分針で倒せば、そりやそうニヤよね。

「……なんで、慣れない太刀なんか使ってたニヤ？」

色々な武器を使いこなそうとするのは、ハンターとしては正しい姿勢ニヤけど……。 「いやー、ランスって野暮つたいでしょ。デカイ盾で、あたしの美貌も隠れちゃうし。せつかく可愛いザザミ装備作った事だし、思い切って太刀に転向してみたんだけど、やっぱ向いてねーわ」

アハハと豪快に笑う旦那さま。

な、なにが美貌が隠れるニヤ……。舐めプもたいがいにしるニヤ……。ボクたちオトモの事もちつとは考えろって話ニヤ……。

「ニヤニヤ？ でも、どうしてあのクエ失敗の後、ポケーつとしてたのニヤ？」

そうボクが聞くと、

「そ、そそ、それは……」旦那さまは真っ赤になって、しどろもどろになったのニヤ。

「恋わずらいか……」とツキミが心得たようにボソリ。「あのハンマー使いニヤね」

うわーうわー、と旦那さまは取り乱して、手をバタバタ。

ボクはしばらくその意味を考えたニヤけど、やっと飲み込めたのニヤ。

全身に怒りが満ちてきたニヤ。

ボクは怒ったディアブロスみたいに黒い息を吐いたニヤ。ニヤーボフー。

「そんな発情期のネコみたいないやらしい理由だったニヤか……」

「は、発情!」と旦那さまは目を白黒。「ダイフク、アンタねえ、言う事に欠いて……」

「この、エロハンター!」

ボクは、にやんにやん棒のキツイ一撃を、ポカリと旦那さまの頭にお見舞いしてやったのニヤ。いい気味ニヤ。

<おわり>

【みわくのラーメンチケット】

ある日の事ニヤ。

「ダイフク、これを受け取りなさい」

旦那さんがさも大事そうに紙切れを二枚渡してきたのニヤ。見ると「ラーメン券」と
下手な字で書いてあるニヤ。

「これは……？」

「よく考えて、大事に使うのよ。ツキミにも渡しておいて」

「あ、お金は自分で払うのよ」

そう付け加えて旦那さんは買い物に出かけて行ったニヤ。

ラーメン券とは一体何ニヤ？

ラーメン券には、有効期限と、譲渡禁止、再発行不可など約款事がつらつらと書いて
あるんだニヤ。

何かとても大切なものらしいニヤ。

「ただいまニヤよ。ぼけーっとした顔してどうしたダイフク」

ツキミがどこからかふらつと帰ってきたニヤ。ボクはもう一枚のラーメン券をツキ

ミにも渡したニヤ。

「お、おまえこれはラーメン券！」

ツキミの目がギラギラと輝きだしたニヤ。

「これ何ニヤ？ ラーメンってあのラーメンニヤか？」

ツキミはラーメン券を凝視しながら話したニヤ。

「……オレたちはラーメンを食べるのを禁止されている。オレたちの健康を気遣った旦那さんが禁止令を出したんだ。オレはそんなの無視して何度かラーメン屋さんに行ってみた……だがことごとく入店お断りされて……、出前を頼んだ時もオレの目の前で持って帰りやがったんだあの野郎……とにかくラーメン券が無いとラーメンを食べる事ができないんだっ！ オレは何度旦那さんを呪ったか知れない……」

ボクもラーメン禁止だったとは知らなかったニヤ……。ラーメンは、ボクがまだノラだった頃に旅先で何度か食べただけだったニヤ。

ツキミの顔を覗き込むと、うつすら目に涙まで浮かべているんだニヤ。

「ダイフク！ 早速行くニヤよ」

ツキミは財布を掴んだニヤ。

「でも旦那さんがよく考えて使いなさいって言ってたニヤよ」

「オレは今ラーメンが食べたい。安心しろ、一番うまい店に連れて行ってやるニヤよ」

ボク達はポーチを下げた街に繰り出したニヤ。

おいしそうなビストロや屋台が並んでいるけど、ボクらが目指すのは街一番のラーメン屋さんニヤ。

「でもツキミ。旦那さんが禁止にしたって事は健康に悪いのは食べちゃダメって事ニヤ？ ボクが健康で強いオトモアイルーになれたのは、あんまりラーメン食べた事ないからって事ニヤよね？」

ツキミは、コイツ分かってないという顔をして首を振るんだニヤ。

「オヤジ、ラーメン特盛！」

ツキミはボクの知る限り最大の格好良きで、ラーメン券を渡して注文したニヤ。

「ボ、ボクもニヤ！ オヤジラーメン特盛！」

ボクも真似してみたけど、なんかちよつと違ったニヤ。

「ラーメン特盛ふたつ、お待ちどうさま！」

出てきたのは分厚いチャーシューや煮卵などが乗った特別なラーメンニヤ！

ボクはちゆるんと食べてみたニヤ。

う、ウマイニヤ！

こんなにおいしいラーメンは今まで食べた事ないニヤ！

「ツキミ！ おいしいニヤねえ」

ツキミを見ると、今まで見た事ないような顔でラーメンを心ゆくまで味わってるみたいニヤ。

カエダマ？ つてのをお願いすると、次々とラーメンが増えてまるでイリユージュン！

ボクもツキミも思う様に平らげて、もうお腹ポんポんニヤ。

ボク達は帰りながら、余韻に浸っていたニヤ。

「ラーメンおいしかったニヤー！」

「だろ？ 次はいつ食べられる事やら」

「早く次のラーメン券ちようदैってボク旦那さんに頼んでくるニヤー！」

「おいダイフク……」

買い物から帰ってきてた旦那さんは、調査したり入念にアイテムチェックをしていたニヤ。

「薬ヨシ、罨ヨシ……これからギルドクエでかなりの死闘になると思われるから、ツキミとダイフクも気を引き締めて……、つて……おまえら何だその腹はー!!」

ニヤワワ……これはどうしたことニヤか。引き締まって颯爽としてたボクのスタイルが……。

ツキミも突き出たお腹で耳もすっかりシヨンボリしてるのニヤ。

「根性入れニャおし！ 今すぐ腹筋バキバキに割ってこーい！！」

おわり

b y チコ

【オトモたちの休日】

ボクはダイフク。まっしろ毛並みのオトモアイルー。回復笛の扱いには、ちよつとうるさいニヤ。

だけど、最近のボクたち（ボクと先輩オトモアイルーのツキミ）ときたら、狩りにも行けず、お留守番ばかり。

それというのも、孤高のぼっちハンターだった旦那さんに、初めての狩り友ができたせいなのニヤ。しかもふたりも。

友狩りの楽しさに目覚めた旦那さんは、すっかりボクたちを放つたらかし。

毎朝バツチシおめかしして、女ハンターさんふたりと狩りに出る日々……。

ボクたち暇なんだニヤ。つまんないニヤ。

「だいたい旦那さんはオレらを軽く扱いすぎる」

旦那さんのマイルームで留守番していると、先輩オトモのツキミがニヒルに言いだしただニヤ。

「オレらが今まで何度旦那さんを助けてきたか」

「そ、そうニヤ！　ちよつとともだちができたからって、ボクらをポイってのは、あんま

りニヤ！ 勝手ニヤ！」

「旦那さんがリオレイアにハメられてピヨツたときなんて、オレが、必死で尻を叩いてモンスターを挑発して引きつけたから、九死に一生を得たんだニヤ」

「ボ、ボクもニヤ！ 旦那さんがババコンガの放屁を食らって回復不能の大ピンチつたとき、回復笛を吹きまくって、体力を回復させたニヤ！」

「オレらあつての旦那さんニヤ。それを理解してないニヤ、ね」

ツキミはそう言うのと、突然、アイテムボックスのフタをゴトリと開けて、ごそごそと上半身をつっ込んだのニヤ。

目をまん丸にしたボクの目の前で、勝手に取り出した水色の瓶は……『栄養剤』？

ツキミはためらうことなく栄養剤に口をつけ、ごっふごっふと飲んでしまったニヤ！

「ツ、ツキミ……！」

「ニヤツフー……！」目を星のように輝かせたツキミがピカーンとガツポーズを決めたニヤ。「効くニヤアアアア」

と、とんでもないことをするニヤ！ アイテムボックスには絶対触るな、と旦那さんは眉間にシワを寄せたテオ・テスカトルみたいな顔で、ボクたちにきつく言いつけているのニヤ。

「心配するな」ツキミは平然と。「ズボラな旦那さんは、たくさんストックのある道具の

「ダ、ダイフク……おまえ……」ツキミはピクピクして。「ひ、秘薬を勝手に飲むのはさすがのオレもドン引きニヤ……」

ひやく？ つて……『秘薬』ニヤか？

「三本しかないレアアイテムニヤ。おまえつて、ときどき、おそろしいことするニヤね……」

「だーいじょうぶにやー」とボクは楽観的に言ったニヤ。なんだか気分がよくてぽーつとするニヤ。おかしいニヤ。まるでマタタビに触つちやつたときのようなニヤ。

「旦那さんは数字に弱いからよゆうにやー」

「それもそうニヤね」

ツキミはあつさり言つて、自分もボツクスからまた何か取り出したニヤ。

「後輩オトモのおまえが秘薬で、オレが回復グレートくらいじゃカツコつかないニヤ。ワンシヨット、いつとく？」

ツキミはそう言つて、オレンジ色のなんだか美味しそうな瓶を口につけたニヤ。ニヤニヤニヤ？ もしかしてそれは『いにしえの秘薬』？

次の瞬間、ツキミは、激高したラージャンみたいに、金色になった全身の毛を逆立て、雄叫びを上げたのニヤ。にやは。



と、ととととととととと、とんでもないことになったニヤ……。

ボクは、秘薬でハイになっていた反動のせいで、おそろしく気持ちがダウンして、なんだか死んでしまいたくなくなったニヤ。

部屋の中はひどい有様ニヤ。クシャルダオラが暴れたつてこうはならないニヤ。

ツキミとペイントボールの投げ合いをしたせいで、壁も、窓も、ベッドもピンク色で取り返しがつかないほどベツタベタ。

床は、ボクたちが面白がって爆発させた小タル爆弾であちこち焦げだらけ。

本棚にはブーメランが刺さってるし、かごから逃げ出した光虫とか雷光虫とかが部屋中景気よく飛び回って目がチカチカ。

よく覚えてニヤいのだけど、どうも目についたものでデタラメに調べて失敗したらしくつて、『燃えないゴミ』が小山のようにそびえているさまは圧巻ニヤ。

ニヤワワワワ……ニヤワワワワ……。

「つ、ツキミ……」ボクは助けを求めるようにツキミを見たニヤ。「こ、これどうするニヤ……？」

ツキミはさっさと隠れようとして、ボックスの中に上半身をもぐりこませている

ニヤ。

「あ。自分だけズルいニヤー！」

ボクは真つ黒毛並みのツキミの下半身に抱き着いたニヤ。

「ニヤツ。はなせ」

「ゼー……つたい放さないニヤー！」

「こ、こら……揺らすニヤ。倒れる」

「逃がさないニヤよー！」

二匹でバタバタやっていたら、弾みでアイテムボックスがバターンと倒れてダメ押しニヤ。

ガラスの割れる音や、素材の骨が碎ける音、そしてなにやら、赤い逆鱗に傷がつく致命的な音までして、ボクとツキミはもう真つ青を通り越して真つ白ニヤ。

ふと、そこで、何やら紙切れのようなものが何枚か床にヒラリ。

「ニヤニヤニヤ？」

つまみ上げたそれは、ボクたちが旦那さんにあげた『オトモチケット』だったニヤ。

日頃の感謝のしるしとして、オトモたちからハンターさんに贈られる記念の品で、けっこうレアな装備の材料になるものだから、たいていのハンターさんはもうとすぐに使っちゃうのニヤ。

ボックスに入れっぱなしとは、さすがボクたちの旦那さんはズボラ……

「オニヤツ！」ボクが手に持つ二枚のオトモチケットを裏から見ていたツキミが、らしからぬ取り乱した顔で叫んだニヤ。「こ、これは……」

チケットをひっくり返すと、余白の部分に旦那さんのものらしきメモ書きが記されていたニヤ。

『ダイフク、回復笛吹きまくりの大活躍！ あの子もどんどん成長してうれしい！』

『あわや大ピンチ。でもツキミの挑発で助かった！ やっぱりツキミって頼りになる！』

ボクとツキミは顔を見合わせて、競争するように床に散らばったオトモチケットを拾い上げたニヤ。

『初めてのレウス討伐！ ぜったいひとりじゃ無理だった！ がんばったオトモたちに感謝！』

『ついに上位ハンターに！　ここまで来られたのもツキミとダイフクのおかげね』

『オトモたちの大かつやくでジエン撃退！　トドメはネコ式火竜車がさくれつ！　なんか感動して涙ぐんちゃった』

最後の一枚、この前あげたばかりのオトモチケットには、下手だけど一生けんめい描いてある黒いネコと白いネコのイラストが。

『わたしたちは最高のチーム。ずっとこの三人で狩っていきたい』

「オレらは……」　ふだんはクールなツキミの金色の瞳にも、涙がキラリ。「……世界いち幸せなオトモ、ニヤね」

ボクも涙で前が見えないニヤ。

旦那さんが、こんなにも、ボクたちのことを、大事に、大切に思ってくれていたなんて……。

そんなことにも気づかず……ボクたちは、自分たちのことばかり。なんておろかなネコなのニヤ……。

あ。

部屋は、へんなテンションになったボクとツキミが大暴れしたときのままだったニヤ。すっかり忘れてたニヤ。

「こ、こ、こ、これ……これは……つ、ツキミが……ツキミがさいしよに……」
ガクガクブルブル震えながらボクはツキミのほうを見たニヤ。

!?

そこには、毛ドリ玉を使ったあとの緑色の煙が残っているだけニヤ!?

「アニアアアア!?!」

もう一度ゆつくり振り返ると、パチパチ危険なオーラを全身から発して薄ら笑いを浮かべる旦那さんが立っていたニヤ。ヤバイニヤ。ラージャンがただのチンピラに見えるニヤ。

バキ。バキキ。

手の関節を鳴らしてやぶにらみする旦那さんは、はつきり言って、ミラボレアスより危険な災厄ニヤ!

「ダイフク! 歯あくいしばれツ!!」

「ニヤアアアアアアアアアア」

バキツドカツグシャツ。

説明不要の音が響き渡ったニヤ。

だけど、こんな目に遭わされたって、ボクはゼーゼーつたい、旦那さんのオトモをやめるつもりはないニヤ。

(おわり)

【ボクはがんばってるニャ!】

「ボクは頑張ってるニャ!!」

「ダイフク! コラ!」

ボクは振り向きもせず旦那さんのホームを飛び出したのニャ。

だって旦那さん……ボクたち（特にボク）にひどい事を言うんだニャ。

ボクがモンスターに小タル爆弾を投げたところに、ランスで突進してきた旦那さんに見事命中した事や、ちよつと採集してる隙にティガレックスに旦那さんが嘔み付かれた事や……。

クエスト失敗して反省会していたら、旦那さんのイライラの矛先がなぜかボクに向かったんだニャ。

他のオトモ達の手前、特訓が足りないとか怒られたらボクも立場がないんだニャ! モンスターは怖いし痛いし、いつも必死ニャのに……。

ボクは気がついたらぽかぽか島にいたのニャ。

あつちで一日中釣りをしているアイルーや、そつちで日向ぼっこしているアイルーがいるいつもの風景。モンスターとの死闘とは縁がないこの島。

「またノヲオトモに戻るかニヤア……」

旅に出るのも悪くないかもニヤ。

それともこの砂浜でカキ氷や焼きそばを売ったら儲かるかニヤ？

でもアイツとソイツしか客がないニヤ。

大体この島には誰も来ないんだニヤ。

もつと世界中からアイルーや観光客を呼ばないとダメニヤね。

海の上に浮かぶ雲を眺めながらそんな事を考えてたら、どことなくこざかしい声が聞こえてきたニヤ。

「やっぱりココにいたか」

「ツキミ……!」

先輩オトモのツキミが、椰子の木陰から現れたニヤ。

「旦那さん、相当怒ってたニヤ。解雇だー!とかわめてたニヤよ」

「解雇!」

まさかボクが解雇される!?! そんな!

「まったく勝手だニヤア。旦那さんオレらがないとなーんにもできないくせに」
ツキミは鼻を鳴らしている。

待つてニヤ待つてニヤ!

ボクまだ旦那さんと狩つてないモンスターがたくさんいるニャ!

ボクはまだ本気を出せるニャ!

大急ぎでホームに戻りドアに体当たりしたニャ。

「ちよつと待ったニャー!!」

「あ、ダイフクちよつと良かった」

旦那さんはなぜかホクホク顔でそこにいたニャ。

その手にはピカピカの王ネコ剣ゴロゴロが・・・。

「肉球ネコパンチがカワイイから持たせてたけど、やっぱり弱すぎるわ。会議であんたにこれを使わせる事に決まったのよ。」

と言ってボクに手渡してきたニャ。

「か、かつこいいニャ……」

ズッシリと重いその武器は、神々しくさえあつてもう勝つ気しかないんだニャ。

旦那さんはボクの背中に装備させてくれたニャ。

「これでよし」

これが身が引き締まるという思いニャか……。

「さあおいで」

ちよつとマヌケな笑顔で両手を広げる旦那さん。

まあいいニヤ。許してやるニヤ。

ボクは旦那さんめがけて思いつきり突撃したニヤ。

おわり

b y
チコ

【オトモたちの逆転】

ボクはダイフク。中堅どころのオトモアイルー。

けど、そんなボクにも、ついに、待望の自分ができたのニヤ。

きっかけは、先輩オトモであるツキミの里帰りだったニヤ。

ある日、ツキミの故郷の親せきが体調を崩しちやつたという知らせが届き、旦那さんは、

「たいへんじゃないの！ こっちはいいから、アンタすぐ帰ってあげなさい！」

と、ツキミに長期休暇を出したニヤ。

ツキミはいそいそ緑色の風呂敷に手回り品を詰め込むと、首に巻きつけ、四本足で走って拠点の村をあとにしたニヤ。

「いい？ ダイフク。ツキミのぶんも、アンタがしつかりやるのよ」

旦那さんに言われ、ついにこのボクが繰り上げで、オトモリーダーとなったのニヤ！

身が引き締まる思いニヤ……。

でも、ぶっっちゃけ、オトモが一匹じゃ狩りも心もとないのニヤ。

そんなわけで、ネコばあちゃんにお願いして、急ぎよ新しいオトモを派遣してもらったニヤけど……。

「ダイフクーー！ お茶ー！」

マイルームに鋭い声が響いたニヤ。リビングのソファにだらしなく足をのぼし、お菓子を食べながら女性ハンター雑誌を眺めていた旦那さんが、ボクに命じたニヤ。

「は、はいですニヤー！」

ボクは急いでお茶の用意のためキッチンに向かおうとしたニヤ。

「だんなさーん。お茶ですにやー」

甘ったるいネコにやで声がして、茶色毛の若いアイルーが、お茶ののったお盆を手に、旦那さんのもとへすつ飛んでいったニヤ。

「おおー。ミタラシ。アンタってほんと気がきくわねー」

「ぼくは旦那さんの笑顔が見たいだけですニヤ。エへ」

旦那さんにのどを撫でられ、ゴロゴロするコイツこそ、ボクの子分である新入り「ミタラシ」ニヤ。

名前の通り、茶色のふわふわとした毛並みの、まだ幼い見習いオトモニヤけど、気の利く性格と快活な従順さ、何よりボクもしつとするほどの愛らしい容姿で、早くも旦那さんのお気に入りになってるニクイやつニヤ。

「それに比べてダイフクはトロいわねえ」

ハア、と旦那さんはこれ見よがしにため息。ひどいニヤ。ボクがダメなオトモみたいニヤ。ミタラシが異常によく働いただけなのに……。

「ニヤ。旦那さん。せんぱいにそんなことを言うのはやめてあげてくださいニヤ」とミタラシ。「せんぱいオトモのダイフクあつてのぼくニヤ。ぼくなんてまだまだ見習いニヤ。教えてもらうことは、いーっぱいあるニヤ」

「ミタラシ……」単純な旦那さんは、そんな殊勝な態度に早くもホロリ。長年仕えるボクには見せたこともない優しい笑顔でぎゅつとミタラシを抱きしめ、「いいオトモがウチに来たわ。こりやアタリね」

……ボク、立場ないニヤ。



けど、そんなある日のことニヤ。

「つかしいわね……」

旦那さんがアイテムボックスをごそごそしながら、怪訝そうに言ったニヤ。「ハチミツってこんだけだったっけ？ 不死虫もなんか少なくなってる気がするし……」

どうもボックスの中からアイテムが減っている気がするというのニヤ。

「ダイフク……まさかアンタ」

アマツマガツチのように不吉な顔でボクをにらむ旦那さん。

「え？　ち、ちちち違うニヤ！　ボクそんなことしないニヤ！」

前にツキミとアイテムボックスにイタズラして（※オトモたちの休日参照ニヤ）、旦那さんにしこたま殴られてからというもの、ボクはアイテムボックスに近づいてすらいないニヤ。

「ツキミのしわざ……のわけないか」旦那さんは納得いつてない顔。

「どうしましたニヤ？」

無邪気な笑顔のミタラシがマイルームに入ってきたニヤ。旦那さんとボクはアイテムボックスの件についてミタラシに話したニヤ。

「ぼく怖いニヤ……」真つ黒な瞳にいつぱい涙を浮かべて、ミタラシはふるふる震えながら言ったニヤ。「このおうちに、空き巣さんとか入ってるのかもしれないニヤ……」

「空き巣かー」と旦那さん。

「け、けど、大好きな旦那さんの、大切なアイテムボックスを狙うわいやつは、ぼくぜつたい許せないニヤ。怖いけど、ぼくも注意して警戒しておきますニヤ！」

「うんうん。ミタラシはいい子ね」と旦那さんは優しくミタラシを撫で撫で。

カー……。この待遇の差はなんなのニヤ。

ふと気づくと、旦那さんがじーっつとボクを見てるニヤ。

ぼ、ボク、疑われてるニヤ!?

「あ、あんまりニヤ! ボクそんなことしないニヤ!」

「アンタ前科があるからね」

う。その通りニヤけど……でも疑うなんて酷いニヤ。ボクの目にも熱い涙が浮かんできたニヤ。でも旦那さんは気づいてもくれなかったニヤ。



こうなったら、絶対に犯人捕まえてやるニヤ!

旦那さんと採集クエに行くことになったボクは、途中でお腹が痛いと言ってリタイヤして、こっそり村に帰り、マイルームのベッドの下に隠れたのニヤ。

しばらく待つと、コトリ……と音がして、静かにドアが開いたニヤ。ボクの心臓がドキンと跳ねたニヤ。犯人ニヤ。旦那さんならバターーンと下品に開けるニヤ。こいつはさっそく網にかかった犯人ニヤツ!

「ふー。ったく、勘付きやがったか。ニブそうに見えて、ニヤかニヤか油断できん女ニヤ」

ドスの利いた低い声。一発で、性悪ネコってわかる声ニヤ。

ボクは、ベッドの影から、そーそーと様子を伺い、「オニヤ!」と叫びそうになって、慌てて肉球で口をふさいだニヤ。

タバコを口の端にくわえて、手慣れた様子でボックスからアイテムを袋に詰め込んでいるその泥棒ネコは……み、ミタラシ……！

「くくく。そろそろ潮時ニヤかね」

「ちよつと待つニヤ！」

「あ？」

「ミタラシ！ おまえの正体、たしかに見たニヤんよー」

「……これはこれは、せんばいじやないですかニヤ」

いつも通りのセリフなのに、声も、口調も、顔も全然別物ニヤ。毛並みこそ同じ美味しそうなみたらしく団子色だけど、ガラスの悪い目つきに、ニヤニヤ笑いの口、品のないくわえタバコと、ビツクリするくらい別ネコニヤ！

「ミタラシ！ アイテム窃盗の現行犯ニヤ！ おまえのせいでボクが疑われたニヤ！」

「まあ、日ごろの働きの差つちゆうヤツですわ」

すぱーとタバコの煙を吐きながら、悪びれることなく言うミタラシ。

「ボクたちのご主人たる旦那さんに対するこれは重大な裏切りニヤ！」

「おやおや。あんな色気ゼロの筋肉女ハンターに、たいした忠誠心だねエ」

「黙れニヤ！ 旦那さんを愚弄するニヤ！」

「ひどいですう。せんぶあーい」

いきなりミタラシの口調が変わったニヤ。口調どころか、見た目も声もあの愛らしい従順な後輩オトモの姿に180度切り替わったニヤ!

かと思えば、またも豹変。「ククク。バカな主人と愚かなオトモに、このオレさまがなついてやったのを、ありがたく思えニヤ」

頭の中でカツと火花が散ったニヤ!

ボクは怒りに任せて、愛用のブーメランをブン投げたニヤ。

でも、ミタラシは余裕でそれを片手でキャッチ。

「止まって見えるニヤ」

「!？」

「ブーメランってのは……」鋭い動作で手を振るミタラシ!「……こう使うニヤ!」

ぱこーん。ブーメランはまともにボクの顔に直撃ニヤ。

「ま、負けるもんかニヤ! ボクは……旦那さんのオトモリーダー……ダイフクニヤ!」タンコブにもひるまず、破れかぶれで突っ込んでいくボク!

でも、正体を現したミタラシには全然歯が立たなかつたニヤ。こ、コイツのレベルは尋常じゃないニヤ!

ボクは逆にボコボコに殴られて、床に突っ伏し、ミタラシの足で踏んづけられて身動きひとつできなくなつたニヤ……。

「お、おまえ……なにもの……ニヤ」

「小僧が気安くおまえ呼ばわりするニヤ」とミタラシは剣呑な顔でボクを睨んだニヤ。

「こう見えても、オレさまはお前の倍以上は生きてるベテランオトモニヤ」

そ、そんな……ネコは年齢がわかりにくいとはいえ、詐欺ニヤ……。

「この愛くるしきで、行き遅れのバカな独身女ハンターに取り入り、アイテムを散々奪つてドロソ。そいつがオレさまのやり方ニヤ」

ミタラシはのどの奥でクククと笑ったニヤ。ボクは涙をボタボタ落とすことしかできなかつたニヤ。悔しいニヤ。悔しくて悔しくて仕方ないニヤ。ボクがついていながら、大事な旦那さんを、みすみすそんな悪党の被害に合わせてしまうなんて……。

こんなとき、ツキミが居てくれたら……。

「……なるほど。そういう手口か」

どこからともなく、落ち着いたニヒルな声が響いたニヤ。

「だ、誰ニヤ！」とミタラシ。

「まったく、とんだ性悪ネコを我が家に引き入れたものニヤ、ね」

「この声は……」つ、ツキミ……!?

「ど、どニヤ!?! 姿を現せニヤ!」

部屋の隅の影からにじみ出るように、真つ黒毛並みのネコが現れたニヤ。もちろん、

それは、ボクの頼れる先輩、ツキミニヤ！

「お、隠密スキル……！」汗をたらし、驚愕するミタラシ。「このオレが気づかないとは、貴様、ただのメラルーじゃない!? 何者ニヤ！」

「オレの名はツキミ。旦那さんのオトモリーダーにして、ダイフクの先輩」

ツキミはそう言うや、くるりととんぼ返り。

次の瞬間には、羽根飾り付きの優美な帽子と、美しい赤の正装を身に着けた雄姿がそこに居たニヤ！

「……そして、オレのもうひとつの顔……それが『ギルドニヤイト』ニヤ！」

う、噂には聞いたことあるニヤ！

ギルドからの極秘使命を受け、悪さするアイルーメラルーをこらしめるために暗躍する秘密猫騎士たち！

ま、まさか、ツキミがそうだったニヤなんて……！

じゃ、じゃあ里帰りというのも口実？

「……さいきん、女ハンターに悪さする茶色のアイルーが居ると指令を受け、ひそかに調査していたのだが……」

ツキミは静かな炎のように言ったニヤ。怖い声ニヤ。

「まさかオレの旦那さんを狙うとは」怒気をはらんだその瞳がギラリと細まって。「……」

けっして手を出してはいけな女性に、おまえは手を出したのニヤ」

「つ、ツキミーーーーー」

ボクは隙を見てミタラシの足から這い出し、美麗な深紅の騎士姿のツキミの元に駆け寄ったニヤ。

「よくがんばったな、ダイフク」

「ぼ、ボク……ボク……だんなさんのために……」

「もう泣くニヤ」ツキミはボクを優しくよしよししてくれたニヤ。

「ぬぬぬぬ」とミタラシは歯をむき出しにして本性を現したニヤ。「なにがギルドニヤイトニヤ！ コイツをお見舞いしてやるニヤ！」

ミタラシが懐から取り出し、重そうに持ち上げたのは……大タル爆弾G！

あ、あんなものここで爆破されたら……大惨事ニヤ！

一陣の黒い風が走ったニヤ。

ツキミの姿が消え、気づいたらミタラシの背後に移動してたニヤ。

ツキミの手には美しく光る白刃。

ちん、と音がしてツキミのサーベルが鞘に収まると、ミタラシの持っていた大タル爆弾Gはバラバラに分解されたニヤ。

す、すさまじい剣技ニヤ。まったく見えなかったニヤ。

「く、くそつ。これがギルドニヤイトの実力ニヤ……!?!」

「神妙にお縄を頂戴するニヤ」

「そ、そうだニヤ! もう観念するニヤ!」

ボクもツキミの後ろから叫んだニヤ!

「ふふん」突然ニヤリと笑うミタラシ。いきなりまた可愛らしい仮の姿に戻って「せんぱいたち、ひどいですう……。二匹がかりでぼくをイジメて、濡れ衣まで着せて……」

「にや、ニヤニヤニヤ!?!」

「ぼく、なにも知らないニヤ」ホロリと泣きべそかきながら哀れっぽい顔を作るミタラシ。「ぼくがそんな悪いことでできない純粋で無力な愛らしいネコであることは、きつと旦那さんにはわかってもらえるニヤ」

「な、なんですつて……?」

こ、コイツ、この期に及んでまた旦那さんをだますつもりニヤ!?!

「……それはどうかな」

ツキミが不敵に言つて、天井を見上げたニヤ。

フツと天井からにじみ出るように誰かが舞い降り、身軽に着地したニヤ。

それは、フトモモの露出もまぶしい忍者装束に身を包んだ女ハンター。

顔は、キツネのような面で隠されていても、ボクにはひとめで誰かわかったニヤ!

「……まったく。里帰りしたはずのツキミから、いきなりこれ着るなんて言われたときはビックリしたわよ」

仮面のくノ一は、言ったニヤ。

「まさか、この私が、『忍・陰シリーズ』なんて地味な装備着る日があるなんてね」

そう言つて、女ハンターはキツネの面を外したニヤ。

確か、『忍・陰シリーズ』の発動スキルは……『隠密』！

「おかげでおもしれーもん、見られたけどね」

旦那さんは、ミラバルカンより迫力ある笑顔でニッコリ。

「旦那さん!!」

「……ダイフク。ごめんね。疑つてわろかった」

ニヤニヤニヤ！ 初めて……旦那さんがボクに謝つたニヤ？ 感動のあまり、ボクは

号泣ニヤ。頑張つた甲斐あつたニヤ……。

「で」と旦那さんは、ガクガク震える茶色のアイルーに向けて押し殺した声を出したニヤ。「……誰が、行き遅れの、野暮つたい、凶暴凶悪冷酷な、独身筋肉性悪貧乏冷酷女ハンターだつて?」

「ぼ、ぼぼぼぼぼぼぼぼぼ、ぼく……後半のほうは言つてないニヤ……」

ミタラシは精いっぱい可愛らしく、エへ、と笑つたけど、激高した旦那さんには、そ

んなもの通用しなかったニヤ。

「ミタラシ！ 歯あくいしばれツ!!」

「ニヤアアアアアアアアアアア」

バキツドカツグシヤツ。

いつもの説明不要の音が響き渡ったニヤ。いくら、指名手配の性悪ネコとはいっても、少しだけ同情するボクなのニヤ……。



こうして、ツキミもまたオトモに戻り、旦那さんとボクたちはいつもの日常に……

「ダイフクー！ お茶ー!」

「は、はいですニヤー!」

相変わらずネコ使いの荒い旦那さんが、リビングのソファから命令したニヤ。ボクはほとんど条件反射的に返事して、すぐさまキツチンに向かったニヤ。

そんなボクの足元に、誰かが足を引っかけてきたニヤ。

「にやつ!?!」

無様にドテンとひっくり返るボク。ネコの面目丸つぶれニヤ。

「はいはいはい。お茶ならばくがお持ちしますニヤー!」

愛くるしい顔で甘えた声を出したミタラシが、すかさず旦那さんのところへ駆け寄っ

ていったニヤ。

「今日はカモミールティーにしてみましたニヤ。美しい旦那さんの優雅なティータイムにぴったりですニヤ」

「あら。いい香り」

「クツキーも焼きましたニヤ。シナモン入れてみました。エへ」

旦那さんに頭を撫でてもらいながら目を細めたミタラシが、一瞬「へっ」て嫌な目つきでボクを見たニヤ。

……そう。旦那さんに強烈なお仕置きを受けたミタラシは、その反動で、すっかり心を入れ替え、今度こそ本気で旦那さんに心酔してしまったのニヤ。もちろん、見習いオトモからのスタートニヤけど……。

「とんだ性悪ネコが我が家に居ついてしまったニヤ、ね」

ツキミが肩をすくめてニヒルに言ったニヤ。

まったくその通りニヤ！ ボクらの日常ときたら、気の休まる暇がないニヤ！

おわり